

## 続・松代藩の祢津氏伝来の鷹書

### はじめに

松代藩の家老を代々勤めた祢津氏は、鷹狩りに所縁深い一族であった(注①)。すでに稿者は、当家に伝来した新出の鷹書を一冊取り上げ、一丁表と二十一丁裏までの本文を翻刻紹介した(注②)。本稿では、その続きとなる二十二丁表と五十三丁表までの本文を翻刻する。当該書の本文を提示することによって、中世末期以降における鷹狩りの主流のひとつを担った祢津流の鷹術と祢津氏が仕えた松代藩の放鷹文化について、その実相を明らかにする手掛かりとしたい。

当該テキストの書誌は以下の通り(注③)。

祢津泰夫氏所蔵。外題無し。内題無し。縦<sup>24.0</sup>×横<sup>17.6</sup>。四つ目

綴じ。袋綴じ。半葉十行。漢字平仮名交じり文。全六十七丁。裏

表紙見返しにも本文有り。五十三丁裏、六十丁裏は白紙。五十四

丁表と六十丁表に「白鷹記」の本文(有注)。六十一丁表と六十

七丁表に「架と緒」の図解。奥書無し。

### 【注】

- (1) 二本松泰子「近世期における祢津氏嫡流の家伝について―新出の祢津氏系図を端緒として―」(福田晃・中前正志編『唱導文学研究第十二集』所収、二〇一九年十一月)、二本松泰子「信州諸藩の鷹狩り―松代藩の祢津氏の鷹書―」(「グローバルマネジメント」第二号、二〇二〇年一月)。
- (2) 二本松泰子「松代藩の祢津氏伝来の鷹書」(「研究紀要(長野県国語文学会)」第十三号、二〇二〇年三月)。
- (3) 注(1)の拙稿「近世期における祢津氏嫡流の家伝について―新出の祢津氏系図を端緒として―」の再掲。

二本松泰子

【凡例】

- 一 翻刻は祢津泰夫氏旧蔵の鷹書によった。
- 一 翻刻に關しては、できるかぎり原文に忠実になるようにつとめ、改行は原本に従った。
- 一 明らかな誤字や脱字などと思われる箇所はそのまま翻刻し、傍らに(ママ)をつけた。
- 一 改丁は「をもつて示し、(一オ)のように丁数ならびに表裏を示した。
- 一 字体は出来るだけ底本の表記を重んじるように心がけたが、異体字など一部通行の字体に改めたところもある。
- 一 虫食いなどで判別できない文字は□で示した。

本文

などにぬれてをりきてこれゝの徳を／思ひてみしかく切てされは切装束／共云へり又いてさうそく共さためたるハ／尾のなかをり也又鈴付はかりしたるをハ／こかは装束と云也すひかんのわさ也又／鈴持を革にても角などにもする也／すゝ敷共云也鈴板とも云也／一 鷹装束と云事あり是ハこ装束／斗おいふなり／一 装束の枝之事はり革装束又(二十一オ) みの毛装束又かしとり装束又ミた／れ一しやうそく色々あるへし又すゝもち／の革鈴のせいにしたかいて切也又くさる／しやうそくと云もあり是ハ鈴さしと／鈴もちひとつにからくりてするを云也／大たかのしやうそく也又とくき青鷲／のはのねを用也／一 白鷹の装束しろかるへし鈴もち鈴／さし共に白くすへしさてハ紫革／

を用へし又にしきの鈴いた紫のね(二十二ウ) すをすへし惣而白の装束是緒まで／むらさきの色を用事ハしいふをうは／いたる色なれば用也／一 鷹の装束する事かうしやの人に／鷹をすへさせへし又ねやふせと云事／は是も人にすへさせてふせる事を云也／一 餌袋の高さ六寸二分とうのふとさ／三六寸こし革にハ鹿の足革をすへし／口をハふすへ革にてぬいくるむへし又云／高さ五寸尻五分口五寸也又高さ六寸(二十三オ) 口六寸しり二寸なりしりを血たまりと云也／一 しろのゑふくろの装束しろかねしやそく／にすへし白革又ハねりぬきをたゝみて／すへしいつれもくわしくハ口傳に有へし／一 鞆の事かうよりにてかくへし長さ／ハ五寸ひろさ鞆さして返る様にす／へし両方にへりを取てなかに指かけ／をしてとめはにとんはうかしらにし／て結也手くるミの革てんの革にてうら／を赤くして付へしけを内へすへし(二十三ウ) 色ハ青く／する也へりのひろさ手くるミの／つく方ハ二分也一方ハ三分也又手くるミの／革虎ひうの革しかるへしかうより／にてかき青くこく繫へしへりの革／もあいかわたるへし紫かわ御めんかわ／口傳にあり又云鷹たぬきの事長さ四寸<sup>四</sup>／八分へりのひろさ四分也手つるミの革／猿のかわを本とすひやうの革もよし／うら衣ハ白地のあやさなくハかた色の物(二十四オ) とんす但あかき色ハ何成共すへし／こしらハやう日前也ひこのをの長さ／二寸也鞆<sup>みどりの</sup>かたぬき<sup>すへし</sup>／一 餌にと云事はハ大國にて鷹の餌を入／物也日本にての餌袋也／一 からまぐらは鷹を両風につよき時／いるゝと物也たけの高さ仁尺六寸也横／二尺三寸也むねの長さ二尺八寸也板にてさす／へし唐より渡りし時も是に入て渡り／たり／一 夏<sup>なつ</sup>鳥屋に水を置へき舟の

長さ大たか」(二十四ウ)にハ六尺八寸にすへしせうにハ三尺六寸にすへし／一 鞭の寸二尺八寸二尺六寸いづれも五ふんつゝにすへし先をハ打ひしくへし鳥の／頭のけにてゆふ事はハこしつ成るへし又／一 尺八寸二尺一寸二尺三寸也あれも口傳あり又／二尺八寸にして一寸ハひさこはなにして／二尺七寸にすへし／一 そきめのむちの事長さ二尺五寸也中五寸／ハ釈加如来上下二尺ハ地国そうしやうた」(二十五オ)聞廣目を表する也鷹無類のわさ／をしたる時波そきめの所に鈴さしの／さきをあてゝ少きり太夫のくわんを出／す時用也政頼かそきめの鞭と云事は／なりそきめにきりたる鞭持へからす／当家にハ先を丸する也／一 鷹かいのかり杖我かちとをりすへし／うらにまたの有るを用也桜の木也／一 犬かいのかり杖我か笠はともしことくに／是もまたのある桜の木をすへし也又せ」(二十五ウ)このかり杖是も桜の木の本とすたゝに／またの有木をすへし長さ笠のはにつき／くらへて切へしせこ杖にハうら木へよりて／鳥かけの枝とて二寸斗つく枝を一ツ付／へし必またのあり木を用へし条々御傳／あり又せこ杖四尺五寸也／一 犬の膳の事かい敷四節に替也春ハ柳／夏ハ真弓の葉秋ハ柏冬ハ竹の葉是／を折敷の上に敷て飯をもりて汁椀に／へしさらに酪を半分入てさいの有木又」(二十六オ)置へしぬるての木にて箸を一尺二寸／にけつりてする也又八寸五分にもすへし椀／折敷さのミ不替候犬飼のそはにすへし／犬ひき此膳を請取可飼犬のくうへき／程はしにておし分て汁成る水をかけて／かうなり犬鼻を聞すハさら成る酢を／鼻ふくへし酢なくハ酒に焼塩を少／そへて吹へし是犬の膳のはうふ也柏／の葉ハ四節の内常にすへからす口傳あり／一 犬とつかせ

ぬ薬ふしかねを囲に付へし也」(二十六ウ)一 あら犬なつける薬吉か髪のをちをとり／あつめてかわらけにて黒焼にして粉に／にきりそへてくわせへし／一 犬のわすれかいの薬よき酒のかすに足／のあくつをあかを合てよふ程かうへし／其後ハ大きな犬も置所にいなつくへし／一 犬つなきて其内まめかいをかうへ野へ／出る時ハ鼻へ吉酢を吹へし／一 犬のはすはの事長さ上ハ五ひろ一尺也／中ハ四ひろ一しやく也下ハ三ひろ一尺也」(二十七オ)一 はなし犬に藤をつける事さはしと云也／さはしの長さ三ひろ又ハ七尺五寸にもする也／又云藤にて二尺五寸にして付へしとまり／犬にさす時ハすはしり共云也／一 犬のくひたかをハはすハと共云山を共云也／脇よりかけたる繩ヲはおもひたると云也／一 犬のやり繩ミひろ二尺一丈三尺にもする／繩共云はしり共云くひたかをハ青く／赤く黒く三色に打ませてすへし緒／の長さ一尺二寸也」(二十七ウ)一 犬のつなの事四ひろ一尺を本とあまり／にはすハの長さハ物にからまりてわろし／三ひかつ三尺にもしへし谷か家にてつなく／時ハつなど云山野にてさす時はすハと云也／鷹のをき繩といへ共まるはしの鳥に／さす時ハさしなわと云かことくし是ハ常／調也／一 木つなの寸犬のたけにきるへしくさ／りにてつなく事飛也いづれにもとちかね／付へし」(二十八オ)一 犬に鈴さすほんハなしとまり犬に／さすへし鈴のなり下を丸く上をひらく／りうつをよほうに一ツつけ革をくけ緒に／引とさしてかけさすへし／一 犬打とむる事鳥を鷹のとる時犬わ／けんとする時犬の頭をひきたてゝミ／なしはらのさかいを手のかくにて二ツ／三ツ打也別の所ハいくたひ打候共こり／ぬ物也みなしはらとハひたいの事也頭／

のわけめと打へし」(二十八ウ) 一 犬かいの装束あかはのこてにか  
 たきぬの／もんにハれんせんおちいさく五つゝ付／へしふすへ革のこ  
 はかまをきせて／紫のものにてかしらをつゝミてあさい／笠をきせて  
 犬を引へしまつ野へ出る／時ハ犬かい笠ヲきすしてくひにかけ犬に／  
 鈴をさして後かさをきる也扱犬をはは／なつ也一ちやうあゆむ内に三  
 聲つゝ犬に／ゑよと聲ヲかけへし一ちやうに一度草／を打へし犬はな  
 つかいハ聲をしきるにかけ」(二十九オ) こまかに草を打へし犬とま  
 らすハはなつ／事有へからず鈴もきすへからず／一 つかれ犬の事三  
 聲あけによつてむ／かはきのすそをさつとたつてゑい／と聲をか  
 けてほたいうゑをあけへし／そらかくならはありか／と聲をかけ／  
 へしほたひこゑと云あたる時よふ／とかへるこゑ也／一 とまり  
 たる犬成共鷹とりいらさる程／いはなつへからず也」(二十九ウ) 仕方  
 一 さちまつりの事さいはい／□□申たる／玉女さちの御神くる鳥  
 の尾羽も／よろこひ給ひて百はね千はねとらせ／給へと申ことをさほ  
 かやつ御尾をふ／りたてていち／にきこしめしあけよ／と滞而申  
 おんとりたはくろ鳥と云女／とりならはしろとりと申也鷹鳥をとり  
 ／鷹迹とり□いて鳥を犬引のかたへ渡ス／時犬かいかり杖に犬をつな  
 きて笠をう／しろへぬきかけかたひきつきて玉女」(三十オ) の方ゑ  
 向て鳥を請取て□而上也／一 犬かいの装束むもの餌に赤革の袖／  
 ほそふすへ革のはかまをきる事も／ありあさき笠をきへし／仕一 鷹  
 かいの装束にしきのほうしかり衣／革襪也／同一 鷹師の装束ハふち  
 つりのすいかんに／すそこのこはま左にこてをさして／もゝぬきを  
 はく也餌袋におん鳥一ツに／別足一ツ相添てさすへし」(三十ウ) 程

一 おき餌さす事秋冬ハめん鳥春ハおん鳥／をさすへしなをハおもひ  
 つまと云也／同一 餌袋にをき餌入る次第雉子の女鳥／尾先ならば羽  
 かたをハ後を我身の／かたへしてさすへし又男鳥さすハ足／を我身の  
 かたへ向て鳥のうしろを外／ゑむけてさす也／程一 二かさすをハ女  
 鳥を内に外へ向て男鳥を／外にうちへむけて足と足をそろゑて／さ  
 す也是をいんやうさしと云也是をとり」(三十一オ) て女鳥男鳥を一  
 ツ取さすも陰陽の心をさ／すなり鷹なども女鳥男鳥とて見ゑ／す共ほ  
 そ口をハ女鳥と心持をさすへしふ／と口をハ男鳥と心へてさす故也／  
 同一 鴨向て左のはふしを餌袋よりさし／こほしてさすへし是かた羽  
 たれと云也／同一 鷺をハ何も内へ向て両の羽ふしを餌／袋にさして  
 骨を折て左の羽ふし／の脇より頭を出してさす是をもろ／羽たれと云  
 貴人かた羽これをさゝハ我ハた」(三十一ウ) たさすへし口傳あり／  
 仕一 鷹師ハ家より笠ヲきへししきたい／なき物也もしハぬく共くひ  
 にかけてし／また縦貴人下になる共鷹師ハつくはへ／ぬ物也不可有礼  
 条々ならひあるへし／同一 あら鷹たはなちする時之山まつり／の次  
 第玉女に向てかさり物次第御へい／二はらい二うすやう二ひな二おこ  
 ち二し／とき二十せきはん御酒調へる也／同一 はらいの事□申きん  
 せいとうほう」(三十二オ) にしやうたひりうわうなんほうにしや／  
 くだい□有西方にしひやくたいりう有／北方にくたひ□有中有にお  
 うたい／りうわうと申きんせいたかまか原に神／たち神／とゝたりま  
 してやをよろつの神あつめ／すへむつちんかミろミ神ろき申神ち玉の  
 ／御ほうてんにこかねの御戸をおしひらき／しやうれんのまなしりあ  
 さやかにして／さを先かやつの御尾をふりたてゝいろ／にきこし

めし給へさんくさいはいく(三十二ウ)一のつとの事さいはいく吉日りやうしんをゑし申んて口申たるの玉女さちの御かみみねをこさす谷をこす鈴の聲あさやかにして犬の鼻とくくしても羽手千はねとらせ給へと申ことをはらひのせうちんきんたちさをしかやつの御尾をふりたてきこしめし給へと滞而申也(同一玉女に向てをき繩をさして三度おきたてをき繩をとくへし同玉女の口(三十三才)九あしあゆみて其後山へあけへし鷹をあわせてもし一度にとらてあらハさうなくつかれへ犬を入へからす鷹を据あけて其後犬をいれ鳥を立へしとりたらハ鷹師しつにより取飼て犬引のかたへ渡して山まつりさせへし(同一あたら前へつそくさいくあたゝめて飼へしかわねハ鳥においつかすくたりけつくへしとりたらは飼つもりの覺より内に取かいて歸りて湯にてあたゝめて(三十三ウ)山わすれとてかうなりわるくいるれは鷹取する也口傳なくしてゆめく葉かうへからす当家の秘事に十八の秘事三十六の口傳と云事あり(同一けいとハ犬よといふ心也よふとハ鷹をよふき成りけいかふとハ鳥たちそと云き也)一狩聲の事はん鳥とつかれの鳥替へしはんとりにハなりく聲をかけへしつかれにハしけくかへり物也せいらい流にハ一ちやうの内に三聲成り祢津にハしけくかけ候時(三十四才)きによるへし又三聲もほうのことくかけへし(同一三条の院鷹をこのミたまふに定られける御鷹飼黒向あい鷹かひの法を大飼峰式手丸相犬飼狩山峯丸鷹の次第所々を定らるゝ事ハ三条の院にその法あるなり(同一三条院にハつかれの時ハ犬をそはめよせて笠をぬきて手に持て杖を右のかたに

つきてよるへし犬のいる時ハ大杖を打ている也犬かたさゝんほとはつかれ(三十四ウ)あてやれ鼻たちてハはんしなしつめて長閑にほたひ聲をあげよ鳥立ハさけへ鳥たゝすハとつとろにすへし/たかハをちたらんかたよりよつて鳥の足ふたつをそろへて取ておもふほとにむしらせてさてひさにはさみてをしころして飼へし飼へしいき/たる血を飼事鷹のとく也足もはれ/夜風と云病付事あり鳥をおし/ころしたかをやすめて鳥をさまして(三十五才)かふへしたかをやすめて条々口傳に有るへし(同一犬をよふやう家をいたし三聲よふへし/つかれにてハむかばきのそはをやらか/にうちならして後けひくと犬をしめてやかて口傳心へしよくくへといふ心なり(同一おもむきのやう野たち心へし大事也山氣鷹をあけ鈴をさして事を七足/あゆませて三度なうこゑをあぐる也/足緒をさてさしとくへし残かのせこ(三十五ウ)ともハふまへまついぬかい墅に出しいれて杖にて草を三度打也是をわう杖と云也/かり聲ハ一町のうちろし三度也/一番の日とりかいて一をはぬかす先此とりかふ鳥をおとりをハ銀の箱女鳥をハ金の箱にいれてしゆ王の御前に/そなふる也此とり先犬かひの笠に入て/山神に祭也其後一をハぬきてそこにをく其祭文云鹿秤々々此かう/ちにゆすれたまふうしやうむしやう(三十六才)の神たち鷹の鈴の聲あさやかに忘て鷹かひの心とく犬の鼻とく鷹の羽はやく鈴の聲にかくれす水に春ハ金のめとりと一日に手はね百羽/ね口をこさせすとらせたまふと申な/とろかし候をたけたまゑ口右如折/三条院定をうるゝもの也条々口傳有り(一日なミの狩ノ事三日五日七日也日をおつて/の心也日次の

狩ハもゝしきのにくかり／成りせちゑのにへかりの事を云也」(三十六ウ) 一 初と狩と八年の始り鷹をつかい／はしむるをも云也又其年の冬始て／の鷹をつかふをも云也一朝とかり／また巢鷹などをつかふをも云といへり一朝／とかり朝女鳥のく何をも云といへりたかなり／仕一 夕これより廿三方マテと狩とハタへのにて候是ハあとの心也／一 聞すゑ狩とハ明日の狩にとめより／鳥の有所を聞さためて置て其野／に出るを云也」(三十七オ) 一 見すゑ狩とハ鳥の姿を見て置て／いつるをいふ也／一 おほへ狩とハ鳥のありつへき山を分／しあてにかりをするを云也是にハ／皆春にて候／一 鷹のこと葉に鳥の落たる所をは／はたりと云むれをハうこくと云也／一 鷹の鳥をおつて山をつつとあかる羽／をハほこつきの羽と云也箬鷹のほこ／つきの羽を飛時ハ高のゝ雉もかなわ／さりけり」(三十七ウ) 一 こなたの峯よりむかひの峯へ鷹大き／に飛をハますかきの羽と云又とハ／たしの羽共云也／箬鷹のますかきの羽を飛時は／八重はのきしも叶ハさりけり／一 向の峯をとひこへて又こなたへ飛帰る／をゆもちをの羽といふ也／一 鷹峯をなひけてほろの毛としと／云也／一 鷹沢ゑ鳥とつれて飛入をつほ入の／羽という也」(三十八オ) 一 沢のすそ山のをくほらへ行をおつさま／のはと云也／一 谷より峯ゑあかり羽をつかへのほりと／云也／一 嶺より谷へ行ををとし羽と云也／一 こもつちこへと云羽ハ羽飛のよわけな／き逸物にならてハなし其上にさへ／たまの事也鳥につれすきもせず峯／をこもちのこゆることくなり哥にもよまれ／たり／一 鷹の軒端と云ハ鳥をせめておいきり／すかてむねをそらして空へつとある」(三十八ウ) 羽を云なり又おゝ時も此羽ありのけ羽／と云事ハあるへから

す軒はうつと哥にも／あり／一 鷹居あかるとハ下より木などに／あかりたるをも云也すゑたるたかの居あかるとハ／のひあかりたるを云也同こと葉にて心／かわりと也／一 ぬす立と云ハ鷹におわれてつかれたる／鳥か山かけ物かけなどにて犬に口をかく／さんために少度飛て行を云也」(三十九オ) 一 草ほこと云ハ草の上に居たるたかを云也／一 はかせ羽と云ハ峯きハにて鳥を見うしな／ハしと高くあかりたる羽を云也その羽／にて鳥の行／かたを知るなれば羽かせはと云也又鳥／の落草を人の知らぬ時木より立て／とたちたる草の上をすりて人におし／ゑたるを云ともあり又小鷹の鳥をかけ／落して羽をつかふをうらなひの羽と／云也／是も同じ心也」(三十九ウ) 一 鷹の遠山おちと云詞嫌へからす面白／詞也哥にもよめり／一 鷹のとひくたると云詞嫌へからす哥／にもふもとの野邊に飛くたりとよめり／一 大たかたかへりと云詞なきにもあらず又／このミて云へからすうたにもよめり／一 鷹のね木をとると云事自然鷹／を見うしなひ野ふしたる夜木にとまり／たるをいふなり／一 ゑりとハせこの山の峯きわをかくるを」(四十オ) いふなり口とハふもとの事也／一 鷹のとを見と云事有り是ハ巢の内／より里の数をみると云事によりて／とをく見ると云心也一 百里を一目に／見ると云也又霞の半見るといへり／又遠見とハたかをつかふ時鳥のおちを／見るをも又たかの鳥をおふかた見るをも云也／一 たかたすけとハとり飼時たかのうしろへより／てつばさを両の手にてかきあけてあ／つかふ事を云也」(四十ウ) 一 鳥の落たるをハ落草と云也／一 女鳥の羽をハ金羽と云男鳥の羽をハ／白金羽とも云也／一 雪すりの鷹と云事雪野にてあ／またよりあひて雪

にすれたるを云也／又山かへりたるをもいふ也／一 野わたりの鷹十月也冬ハ諸鳥共／に南に行物也それを取たるたかを／云也／一 野されの鷹とハ日々に野数を「(四十一才) ふませたる鷹を云也山野にて日を／へてこかれに取たるをも墅されと云也／一 をすハりのたかとハ巢をかけべき／前に巢山を尋てまいる也それを取たる鷹の事なり／一 とかへりの鷹とハ春の鷹の帰るお／取たるを云也あとにかへる心也其故／ハ諸鳥共皆南に行て冬を送りて／春帰る也其利也／一 小山帰の鷹とハ其年の若鷹の次の「(四十一ウ) 春とられたるを云也年こへぬれ共／もせさる間山かへりとハ定めかたきま／小山帰りと名付て又年をこゑたるか／山帰の名をはなさす小山かへりと云也／扱又年をこへける間若鷹とハ云木／たし初春にハ片山帰りと云也中春／にハ半山帰りと云也暮春にハもろ／山かへりといふ也／一 さほ姫の鷹と云事山の神のたか／と云心也さほ姫とハ口の事を云也」(四十二才) 春の神とハさほ姫を云也さるに／よりて山の神のゆるしなくハ其山に／巢をかけぬと也／一 羽くらへの鷹と云ハ巢山はるに入て大小／共に飛て羽をくらへ大鷹にせう一／羽たけも飛ましたるを妻と定め／置といへる一羽とハ三百ちやうの事也と／云羽なるを百五十町を云也哥にもつま／心見る羽くらへの鷹とよみけると／見へる也」(四十二ウ) 一

野守の鏡の事鷹をうしなひて尋／ぬるに野守に行あいて向ければ／あれなる森の梢にとまりたると／をしへければ行て見るに鷹あり／是を野守の鏡といへる一せつ有り／又鷹のかけ水に帰りて見へけるを見／てとる是をいへると云せつも有り／又もろこしにててい王鹿をからせ給ふ／時鹿塚の中にけ入れければ此塚を／やぶりて鹿をとらんとし

たまふ時この「(四十三才) 鹿老翁とけんして塚の中より／出て後塚をこひ奉るに無相違出され／ければ其御礼として老人帝王へ鏡／を奉る也是をも野守の鏡といへる一説／あり此鏡の置惣心の者の顔ハ移りて／見ゆるあくしんなき者の顔ハうつらす／是はもろこしにての事也又一説には／日本にて帝王に鬼の子鏡を奉る此／鏡のとくにハ違心の者ハ其顔さるさまに／移りいかさまに墅守の鏡にハ説あま」(四十三ウ) たありと也又鷹飼の野守の鏡と云／事ハ別なるへし／一 くれなひのたかと云事あり是ハ一条／院の御時出羽の國ひちかの郡より巢／鷹を奉る也此鷹俄にうせたり何と／尋けれ共なし七日と云曉此たかしん王の御夢ゆめに見へまいらせしやうをハ父を／驚にとられたれば親のかたきをとり／てかやうに身をくれなひになしたると／申也爰さめて御覧すれハうせたり」(四十四才) し鷹出きたりたかの惣身ハ赤毛／にミたれてくれなひ鷹と成りたり／くれなひの鷹と云事哥にも此御代／より讀る／一 たかをつかいはしめられし事ハまた／國の世界江南國の帝王たかをこのま／せ給ふ太才ハ去刀十二月三日申の時西中／國と云國より始るまた國へつたわり／し也國王てんしやうかたちめ鷹かり／に出つかかわせ候事ありきけんせんと云」(四十四ウ) 山の麓にてつかいはしめられたり其／墅の名をハたいせんと云野也白附／の鷹のきハめて羽のはやき事よの／鷹にハすくれたり眼ハ明星のことし／頭ハせいすひとして秋の月に似たり／口ひるハくれ／としてわしの山を／いたゝきたりかたハはん／として波／中に二の岩さし出たるに似たりそは／の毛ハ彼のたかよふことし胸の毛ハくれ／竹のふしをならへたるに似たりうしろ」(四十五才) ハなん山のなかれ

に似たり是を鷹の／わうとす此鷹おちやうすひと云ハ／こうはいの鞆にて据てくれなひのま／きあけのすゝしをさして此野／に押出たり國王御覽して栄花／にほこりて愛し給ひけるにたかお／もさるにてより落てはねをひろけて／死せんとす國王御覽して大きに／きやうをさましておほしめしける折から／あるしん國の夫人参て申様此鷹の」(四十五ウ) 病まんひやうちと申也其時國王此／病を知るならば命をつきてまいらせよ／とせんしありし時彼夫人せんしなら／はうけ給ぬと申てふしきの薬袋よ／り薬を取出して鷹の眼にミちん斗／ぬる又上にもそゝき口にもぬりければ則／本のことくよりも猶すくやかに平癒して／見へければ國王多ひらんあるそも／／なんちか薬ハいかなる薬そとのたまへハ／夫人こたへて申様鷹飼の中」(四十六オ) にハふかむろうと申物十せんの御内にハ／あかたやくと申時國王の給ハくさら／は此薬の本せいみつからにあかすへし／とせんし也夫人申様昔ハちやうせい／殿の内にしてせんしを七度返す中／比ハかひらしやうの内にしてせんしを／五度返す今の夫人ハ帝王の仰に／したかひて彼かうかんをのへて三度／においてハ申へからすと申ければ其時／帝王なんちか其道にハきさい國をたふと」(四十六ウ) あり夫人おうかてうろく給わらず共十五／代よりすゑ人につとうといふ共帝王の／仰にしたかい薬の本せいをもつて是を鷹のまんひやう／を治する薬とす昔ハちやうわた／菟の目をもつてはこめうふもと名付中比ハ／かいちやうの内にして不死の薬と／名付今ハせんとうのもとにて名ハかう／かんにあけ薬をハてんちやうの箱にお」(四十七オ) さめ末代ある代々にいた

るまでたか／をこのまん衆生ハ此本せいをあをきて／つとうへし治用元年太才ハ去／刀十二月三日申の時さりうをうまかき／の前に来とゝまりし鷹をもつてはし／めとすそれより此かたつたわりて／千八百余年也一しゆんわううハあしゆら／たうの大しやうぐんのほん地ひしやもん／でんわう也／一 日本にて鷹をつかいはしめられしハ」(四十七ウ) 仁徳天王の御時和泉の國もす野にて／つかい初られたり清和天王の御宇又／政頼きんやかた野の御かりをつかいそめ／しより当代に至まで天下において／鷹をつかふ事あまねくひろし／秘一 白尾の事ぐゞいのきみしらすにてすゝ／付二枚を付ぐ也無手につくへからす候／春野にかきりたる事也口趣ハ／二月下旬三月初より鷹の心たけて巢／山をおもひ出して古巢の心出る也白尾」(四十八オ) つくと云ハ鳥をおい尾根をこし我か身／を見返し見て雪尾にかゝり春にて／ハなきとおもひ巢山の心を忘くと／いへり政頼かわさと云也悉ハ基房聞／書に見へたる白尾の鷹と云事哥にも／讀り／外一 鷹の本の名有説にはくさい國にてハ／くちといふ也また國にてハすんわううと云也／けいたん國にてハまんせいと云也しんたん／國にてわこてうと云也日本にてハ鷹と」(四十八ウ) 二云也其数多しと云／同一 当家によミ帰りと云秘薬あり是ハたか／物に当りて俄に死する事あり其時／かうへき薬也此外当家の秘薬あ／また有り相傳有へし大事の事にゝ／る口傳にするもの也よもきのね春／白物入こしらへやう口傳に有り／鷹の引哥／一 火をきの鷹といふ事哥に／狩暮し行ゑもしらぬ箸たかの鈴」(四十九オ) ふりならせ火をきせんかも／一 大たかのたかへりと云事哥に／御狩する墅中にたてる一春松たかへる／たかのこひにかもせん／

